領域「環境」における授業テキストの内容分析

－数量や図形、標識や文字、身近な情報や施設に関する内容に着目して－

河野　崇

1. はじめに

中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教育の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」では、これからの時代の教員に求められる資質能力として、(1) 教員として不易とされる資質能力、(2) 新たな課題に対応できる力、(3) 組織的・協働的に諸問題を解決する力の 3 つの視点を明らかにして、教員の養成・採用・研修を通した取り組みを提案している。

また、教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則の改正がなされ、この改正に伴い、平成 31 年 4 月 1 日より新教職課程がスタートすることになった。新しい教職課程では、科目区分を大括り化すること、履修内容の充実を図ることの二つの視点から、より実践力指導力のある教員の養成を目指している。

こうした中で、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」の創設がなされた。幼児期の学校教育を実践していく専門家としての幼稚園教諭に求められる資質能力は、平成 30 年度実施幼稚園教育要領に示す 5 領域の教育内容に関する専門知識を備えた専門性と、5 領域に示す教育内容を指導するために必要な力、具体的には、幼児を理解する力や指導計画を構想し実践していく力、様々な教材を必要に応じて工夫する力等の実践力の二つの側面から見ていく必要がある。このため、新しい教職課程では、幼稚園教諭免許状において、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」が創設されることになったのである。

「領域に関する専門的事項」への変更については、次の点に留意する必要がある。「領域に関する専門的事項」の考え方として、幼稚園教育において、「何をどのように指導するのか」という視点で見たときの「何を」を深める部分である。

「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。)」については、平成 30 年度実施幼稚園教育要領の 5 領域を踏まえ、具体的な保育場面を想定して、保育実践力を身に付けることを目指している。各領域の学問的な背景や基盤となる考え方を学修する「領域に関する専門的な事項」の内容と関連させ、指導方法について具体的に理解できるようにシラバスを作成する必要がある。

領域に関する専門的事項、幼児と環境の全体目標は次の通りである。

・当該科目では、領域「環境」の指導に関連する、幼児を取り巻く環境や、幼児と環境との関わりについての専門的事項における感性を養い、知識・技能を身に付ける。

保育内容の指導法、保育内容「環境」の指導法の全体目標は次の通りである。

・領域「環境」は、「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことを目指すものである。幼稚園教育において育みたい資質能力について理解し、幼稚園教育要領に示された領域「環境」のねらい及び内容について背景となる専門領域と関連させて理解を深め、幼児の発達に即して、主体的・対話的で深い学びが実現する過程を踏まえて領域「環境」の具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。

本研究では、領域「環境」における授業テキストの内容分析をする。授業テキストの記述内容から、領域に関する専門的事項で扱う内容と保育内容の指導法に関する科目で扱う内容について、何をどのように指導するのかという視点で見たときの、「何を」と「どのように」について、その具体的な内容を明らかにしていきたい。また、本研究では、主に、領域「環境」の中で、数量や図形、標識や文字、身近な情報や施設に関する内容を取り上げて分析をする。これらの内容は、「どのように」に関すること、特に、保育内容の指導法に関する科目で扱う内容が分かりづらいという筆者の課題意識から、取り上げることにする。

2. 研究の目的

領域「環境」における授業テキストの内容分析をすることで、領域に関する専門的事項で扱う内容と、保育内容の指導法に関する科目で扱う内容について、その具体的な内容を明らかにする。領域「環境」に関する学問的な背景や基盤となる考え方など、領域に関する専門的事項で扱う内容と、具体的な指導場面を想定して保育実践力を身に付けることなど、保育内容の指導法で扱う内容について、領域及び保育内容の指導法に関する科目の中で取り上げる内容を分析し、授業テキスト選びの参考にする。

3. 研究の方法

平成 29 年前後に出版された領域「環境」の授業テキスト 5 冊を文献として取り上げた。文献の選出で、平成 29 年前後を基点としたのは、再課程認定のスケジュールとして、平成 29 年に、教育職員免許法施行規則の改訂や教職課程コアカリキュラムの策定、再課程認定の説明会や事前相談会が開催され、申請書の提出が平成 30 年 3 月に行われるなど、新しい教職課程に沿って、その準備が進められているからである。この 5 冊の授業テキストから、主に、理論面に関する内容、授業テキストの構成、授業テキストの構成内容、主な教育内容の観点から分析をする。

4. 授業テキストの内容分析

（1）生活事例からはじめる－保育内容－環境

第 6 章の 7、物・数・図形・標識・文字などの認識（2）に数・図形の認識、（3）に標識・文字の認識、第 7 章の 2、数量や図形との出会い（1）に数量、（2）に図形、第 7 章の 3 に標識や文字との出会いの内容が掲載されている。

この章の中から、理論面に関する内容について、各項目でどのようなことが書かれているのかを見ていく。

理論面に関する内容		
項目	内容	分類
数・数量の認識	・幼児期には、数の感覚を豊かにする必要があると言われている。	【教育内容】
	・数を数えるためには、「1 対 1 対応」を理解する必要がある。1 つの物を「1（いち）」と数える経験である。	【教育内容】
	・「帽子をかぶっているグループとかぶっていないグループ」、「あか組としろ組」などの仲間分けは集合、系列の概念につながっている。	【教育内容】
	・「1 対 1 対応」ができると、3 歳児では、20 以下、4 歳児では、20 以上の数が数えられるようになると言われている。	【発達や特徴】
	・○△□などの図形の感覚を豊かにする玩具などがあれば、遊びを通して子ども達は図形の感覚を磨いていくことができる。	【援助】
	・図形の特徴を体験を通して理解できるような遊び環境を整える必要がある。	【援助】
標識、文字の認識	・日常生活で文字を目にすることを通して、文字が読めない子どもでも文字の機能について理解していく。	【教育内容】
	・文字の習得には一つの文字が一つの音を持っていることの理解が関連していると言われる。	【教育内容】
	・個人差はあるが 3 歳児くらいになると、「何てかいてあるの？」と興味を持つ子どももいる。散歩などの機会に、標識の意味を説明すると興味を持って自分なりにかいてあることを守ろうとする姿が見られる。	【発達や特徴】
	・文字を読んだり書いたりすることよりも、まずは、文字に興味を持ち、文字を知りたい、使いたいという意欲を育むことを大切にしたい。	【援助】
	・日常生活の中で標識の意味を知らせていく必要がある。	【援助】

理論面に関する内容では、教育内容について説明するもの、子どもの発達や特徴について説明するもの、保育者の援助や留意点について説明するものがあることが分かる。このことから、理論面については、【教育内容】【発達や特徴】【援助】に分類することにする。

授業テキストの構成では、ポイントの解説、導入例、事例という展開で内容を解説している。

	数量や図形との出会い　数量	分類
ポイントの解説	・日常生活の中で取り扱う。　・グループゲームを使う。 ・子どもどうしの話し合いをする。	【解説型】
導入例	幼稚園等で数を取り上げる場合、先ず子どもたちが、数についてどのような認識を持っているのか知る必要がある。 みなさんは数というものを知っていますか。見たことがありますか。見たことがある人は、どこで見たか教えてください。 子どもの数の認識を知った上で、次の展開を考える。	【導入型】
事例 1	子どもたちに、今日の出席の人数を聞く。また欠席の人数も聞くという活動をすることによって、子どもが数に気付き、認識するようになる。	【思考型】
事例 2	おやつをわける活動時、一人一個ずつだと今日はいくつおやつが必要ですか。また人数分のお皿を用意してくれますか等問いかける。	【思考型】
事例 3	トランプカードを使った様々なゲーム 2 枚のカードの大きさ比べ 4 枚のカードの大きさ比べ（2 枚の足し算）	【思考型】

授業テキストの構成内容では、教育内容の解説をするもの、問いかけをして教育内容に対する興味・関心を引くもの、事例から考えさせるものがあることが分かる。こうした内容は、【解説型】【導入型】【思考型】に分類する。

主な教育内容について、図形では、丸・三角・四角という形を知っているか聞く、保育室のなかで○・△・□を探す、絵本の読み聞かせで○・△・□の題材を取り上げる、3 つの形を紙にかいておいて自由にお絵かきする、3 つの形をみんなで協力してつくってみる。標識や文字では、身近で知っている標識（マーク）を聞く、園内にあるいろいろな標識（マーク）をさがす探検をする、標識をつくる、などの内容が掲載されている。

（2）体験する　調べる　考える　領域「環境」

第 2 部、学びのポートフォリオ、体験する・調べる・考えるの 08 に数量・図形に親しむ、09 に標識や文字の必要性を育む、10 に身近な情報や施設を生かし、生活を豊かにするの内容が掲載されて

いる。

次に、理論面に関する内容について見ていく。

理論面に関する内容		
項目	内容	分類
数量や図形に親しむ	・小学校教育で行う加法や減法の基礎は、幼児期の遊びや生活のなかにある。	【教育内容】
	・生活のなかでの数量体験を重ねるうちに、満 3 歳児を過ぎる頃には 3 までの数がわかるようになり、数えなくても見ただけで「3 つ」と言うようになる。	【発達や特徴】
	・満 5 歳頃には 5 を理解し、5 歳児は「(5 人グループで) 牛乳が今 3 本あるから、あと 2 本いるね」など数の合成・分解もできるようになり、また、5 以上の数の操作もできるようになっていく。	【発達や特徴】
	・日常生活のなかで数えたり量ったりすることの便利さと必要感を保育者自身が気づき、かつ様々な図形に関心をもつことが重要だといえる。	【援助】
標識や文字の必要感を育む	・標識には意味があり、人が人に向けたメッセージでもあります。コミュニケーション手段の一つであるといってもよいかもしれません。	【教育内容】
	・幼児期から私たちは、絵本を読んだり郵便ごっこをしたりすることで、体験的に文字のすばらしさを感じている。	【教育内容】
	・幼児期に文字の必要感を育むことが、小学校での文字教育への移行を容易にする。	【教育内容】
	・意図的もしくは無意識に文字に接し、満 5 歳児までには、ひらがなを読めるようになっています。	【発達や特徴】
身近な情報や施設を生かし、生活を豊かにする	・学生時代には、自分の暮らしている地域や大学付近に積極的に出かけてみることをおすすめする。	【教育内容】
	・保育者自身が、地域の催しや出来事など様々な情報に興味や関心をもたなければ、子どもたちに折りにふれて提示し、興味や関心を引き出すことは難しい。	【援助】
	・図書館や高齢者福祉施設などの公共施設も日頃から利用し、その良さを感じていなければ、子どもと一緒に園外保育等にも出かけられない。	【援助】

授業テキストの構成では、全体の概要を説明した後、保育現場で行うことのできる実践事例を主に

紹介している。

	日常生活での数量の体験を思い出そう	分類
全体の 概要説明	園生活のなかで子どもは、人数や物を数えたり、量を比べたりしています。実習園やボランティア先の園では、子どもはどのような体験を通して数量に親しんでいましたか。友達と一緒に思い出してみましょう。	【解説型】 【導入型】
実践事例	準備物：コピー用紙 1 枚と筆記用具 ①二人一組になる。(3 人でも可) ②二人のあいだに紙を置く。 ③「園で子どもたちがどのような体験を通して数量に親しんでいたのか」を話しながら、紙にキーワードを書きこんでいく。時間は 10 分程度。 ④下の枠内に自分なりにまとめてみましょう。	【活動型】

授業テキストの構成内容では、保育現場で行う実践を体験しながら学習するものがある。こうした内容は、【活動型】に分類する。

主な教育内容について、数量・図形に親しむでは、「なべなべそこぬけ」をやってみよう、すごろくをつくろう、おやつを分けてみよう、自然のなかの形を探そう、スタンピング de アート、積み木で遊ぼう。標識や文字の必要感を育むでは、標識をみつけよう、しりとりに挑戦！、絵本の紹介カードを書いてみよう。身近な情報や施設を生かし、生活を豊かにするでは、生活や学びにかかわる情報を集めよう、地域マップをつくろう、動物園クイズにトライ！、などの内容が掲載されている。

(3) 新訂　事例で学ぶ保育内容　〈領域〉環境

第 6 章に文字や標識、数量や図形に関心をもつ、第 7 章の 1 に、身近な情報や出来事に興味をもつの内容が掲載されている。

次に、理論面に関する内容について見ていく。

理論面に関する内容		
項目	内容	分類
文字に親しむ	・早期に文字教育をしてよい環境にあるわけではない。 ・文字を教える時期については子どもに応じて適切な判断が必要だと考える。 ・「おはよう」「ありがとう」といった挨拶や、「入れて」「お砂場したいな」といった遊びのなかで言葉のやりとりをすることが、幼児の言語的な指導の第一歩である。	【教育内容】 【教育内容】 【発達や特徴】

	・文字表現は大切な表現手段であるが、幼児期に描画表現や身体表現など、より自由に自分の感性が表現できる活動をふんだんに行い、感性を養うことがまず何より大切である。	【援助】
標識に触れる	・文字の読めない子どもはもちろん、文字の読める子どもにとっても、絵やマークで示された標識は、文字情報以上にその内容を明確にイメージすることができる。 ・標識の有用性に気づいた子どもは、遊びのなかでも自ら標識をつくって活用する。 ・保育者はわかりやすく親しみやすい表示を園内の環境として整える必要がある。	【教育内容】 【発達や特徴】 【援助】
数や数字に親しむ	・拾い集めたドングリの数をかぞえる、サッカーのメンバーの人数をかぞえる等の経験を積み重ね、ものの個数と数字が対応していることを実感していく。 ・数を比較し、どちらが多いか、少ないか、同じにするにはどうしたらよいか、3 人で分けるにはどうしたらよいかなどについて考えようとする。 ・保育室の壁面には、クラスの友達のお誕生日表やカレンダー、日付表が貼ってあったり、時計がかけてあったりすることで、日付や時間という抽象度の高い数に関しても、視覚的に理解しやすい工夫がされている。	【教育内容】 【発達や特徴】 【援助】
量をはかる、比べる	・子どもは実際に手や体を動かし、「やってみて」、ものの量をはかったり比べたりしている。何度も繰り返すうちに、「これくらいでいいかな」「リボンはこのくらいで切れば、ちょうどいいはず」と、自分に合った長さを感じとれるようになり、ほぼ失敗なくリボンを適当な長さに切れるようになる。 ・量の感覚は、あくまで具体的な場面から培っていくしかない。園のバケツ、じょうろ、リボン、自分のコップなど、日頃使っているものにおける量を、子どもが自分の目で見て捉える経験を大切にし、量の感覚を育てることを大切にしたい。	【発達や特徴】 【援助】
さまざまな図形に触れる	・子どもにとっては、自分のイメージした図形を描いて表現することもまだ困難である。 ・子どもの一つ一つの表現に耳を傾け、何を表現しようとしているのかを聞き取る姿勢を忘れずにいたい。「こんな感じかな？」「ち	【発達や特徴】 【援助】

	ょっとここに描いてみて」と、できるだけ子どもの思い描く図形のイメージを具体化させていく。 ・時に見守り、時に手助けしながらも、丸や四角、ハート形など、いろいろな形を自分で描いてみる機会を大切にする。	【援助】
身近な情報や出来事に興味をもつ	・子どもは毎日の生活のなかで見聞きする身近な情報に興味をもって関わり、それらに関する知識を獲得していく。そして、ときおり遊びのなかで再現し、友達とやりとりを交わす姿が見られる。 ・子どもたちがどのような事柄に興味や関心をもっているのか、遊ぶ空間、遊具、素材、道具などにはどのようなものがあり、どのように配置されているのか、そして、同じクラスの仲間関係、友だち、保育者、保護者や地域の人々といった園内外の人との関係やかかわりなどについて、ていねいに見取っていくことが大切である。	【発達や特徴】 【援助】

授業テキストの構成では、事例の概要、事例、事例の解説という展開で内容を解説している。

	文字に親しむ　マークシールをきっかけに	分類
事例の概要	上履き、リュックサックといった子どもの持ち物にひらがなで名前が記されているのはもちろんだが、靴箱、ロッカーには、「ひらがなで書かれた園児の名前」と「自分固有のマークシール」がつけられ、自分の靴箱やロッカーがどこにあるのかすぐに見分けがつくという配慮がされている。	【解説型】
事例	カブトムシのマークだね 靴箱やロッカーにつけたマークシールには､4 歳児と 5 歳児のペアに同じ形（チューリップ、船、ヒマワリ等）が使用されている。「ぼくのはなぐみさん（4 歳児）もカブトムシのマークだね」「あのひこうきのマークのお兄さんがね…」と、まだ名前の識別ができない子どもにとっては、このマークシールが相手を覚える手がかりになったり、会話のきっかけになったりすることも少なくない。	【事例型】
事例の解説	文字への関心が高まるにつれ、徐々に子どもは記号としてのマークシールではなく、友達の名前を覚え、文字情報を手がかりとするようになる。そのため、4 歳児の世話も一段落する 5 歳児の 6 月ごろにはマークシールを取り除き、ひらがなのみで名札や靴箱に記名していく。このように、記号としてのマークと文字を併用	【解説型】

	するところからスタートし、段階を踏んで文字への関心、必要性に気づけるようにする。	

授業テキストの構成内容では、実際の保育現場での事例を交えて紹介しているものがある。こうした内容は、【事例型】に分類する。

主な教育内容について、文字に親しむでは、絵本の読み聞かせを通して、文字遊びを通して。標識に触れるでは、部屋の看板作りを通して、街づくりを通して交通標識の必要性に気づく、当番表を活用して、実際の交通標識に気づく。数や数字に親しむでは、時計を活用して、遊具の数をかぞえる、お店屋さんごっこの経験から。量をはかる、比べるでは、高さの感覚を養う、量をはかる、人数を比べる。さまざまな図形に触れるでは、影絵でものの形に気づく、積み木の形状に気づく、折り紙で図形を認識する。身近な情報や出来事に興味をもつでは、事例として、天気予報、毎日の日付、クラスの友達、自分の発見を友達に伝える、子どもの遊びを伝え合う、さまざまな情報ツールー図鑑、などの内容が掲載されている。

(4) 演習　保育内容「環境」－基礎的事項の理解と指導法－

第 7 章に、日常生活の中で数量や図形などに関心をもつこと、第 8 章に、日常生活の中で標識や文字などに関心をもつこと、第 9 章に、生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつことの内容が掲載されている。

次に、理論面に関する内容について見ていく。

理論面に関する内容		
項目	内容	分類
数との出会い	・私たち人間は生活の中で必要に応じて数を用いることにより、物の数を数えたり、量を測ったり、それが金銭という価値に変化したり、時間という概念に変化することで、数という存在が、私たちの生活を支えるものとなっていることに気が付く。 ・「10 数えたらね」とは、園庭からよく聞こえてくる言葉である。遊具を使う時間を、10 という数で計っているのであるが、子どもたちは、数という概念を自らの必要感に基づいて使っている姿がある。	【教育内容】 【発達や特徴】
図形との出会い	・1 歳くらいからクレヨンを握り最初に描画として現れるのが、点や線、「なぐり書き」と言われる行動であるが、次に現れるのが形としての丸という図形である。 ・4 歳半ばごろになると、目と手の協応が発達し始め、三角形や四角形をかき分けることができるようになってくる。	【発達や特徴】 【発達や特徴】

	・指先を使って、自分の意図する形をかいたり、はさみを使って切ることを楽しむ姿がある。 ・年長児ともなると、折り方を教えてもらいながら細かい物でも折ることができるようになり、四角い紙から様々な形に変化していく楽しさを味わう。	【発達や特徴】 【発達や特徴】
標識や 文字への関心	・様々な領域と結び付く総合的なものであるが、「遊びや生活の中で」「日常生活の中で」など、子どもを取り巻く身近な環境を通して「標識や文字に興味や関心をもつ」ことが共通に示されている。	【教育内容】
情報化社会の 中で生きる 子どもたち	・時代の変化はさらに加速し、私たちが想像できないこれまで以上の情報化社会がやってくることを考えると、今を生きる子どもたちに必要な経験を、しっかり保障することが求められるだろう。 ・生活に必要な情報を自らの目や耳で捉えるなどの直接的な体験は、生涯にわたる生きる力の基礎となるため、情報機器等によるバーチャルな体験ではなく、五感を使った生きた体験を、保育計画に意図的に落とし込む必要がある。 ・乳幼児期こそ原体験としての学びが豊かになることを願い、園内にとどまらず、広い視野で保育を計画することが大切である。	【教育内容】 【援助】 【援助】

授業テキストの構成では、いくつかの保育現場での事例を交えながら解説を加えている。

	数との出会い　「いっぱい」という表現	分類
事例の 紹介	夏から秋にかけては、松林の中にたくさん落ちている松ぼっくりを集めて山にしては、「いっぱいだね」と友達同士顔を見合わせ楽しむ子どもたち。「いっ～ぱい！」と手を大きく広げて、笑い顔をあげて遊び合っている。	【事例型】
事例の 解説	・2 歳から 3 歳の子どもたちは、1 つ、2 つ、3 つぐらいまでは数えることができるが、それ以上になると「たくさん」「いっぱい」という言葉で表現し、抽象的に物の数を量として捉えていることが分かる。 ・おやつや昼食の量が「多い」「少ない」、粘土をへびのように長くしては「長い」「短い」、積み木を積み上げては「高い」「低い」などの対になる概念の理解が少しずつ進み始め、見た目ですぐにその違いに気付くようになってくる。 ・早く数を覚えさせることであったり、日常の数の記憶を数式にして覚えさせようとするのではなく、物の数というものは、1 つ 1	【解説型】

	つが集まって形成されることを感じることができるように、それが次第に数えることへの興味へつながるように、楽しみながら関心を育てていくことが大切である。	

主な教育内容について、数との出会いでは、自分の指を動かしながら数と出会う、「いっぱい」という表現、遊びの中で数と出会う。図形との出会いでは、子どもたちの積み木遊びから、立体から平面へ、平面から立体へ、数学の基礎的概念の形成。日常生活の中で標識や文字などに関心をもつことでは、標識や文字への関心、所属、場所を示す標識、社会の中でのきまりとしての標識、伝える手段としての文字、小学校以降の学習の基盤として。生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心を持つことでは、情報化社会の中で生きる子どもたちで、生活に関係の深い情報や施設、地域社会と保育、などの内容が掲載されている。

(5) 保育内容環境　あなたならどうしますか？

第 5 章、子どもを取り巻く物的環境の 4 節に数量や図形、5 節に文字・標識に対する感覚の内容が掲載されている。

次に、理論面に関する内容について見ていく。

理論面に関する内容		
項目	内容	分類
数量や図形	・その後の小学校での学習への円滑な接続のために大切なことであり、実際には各学校における教育の特性を重視して行うが、園においても、教科の前倒し学習ではないことを踏まえつつ、幼児期における関わりのある姿をしっかり捉えた上で小学校の教育課程を見通して、接続を意識したカリキュラムを検討する必要がある。 ・数量や図形に関しては、子どもの日常生活の中で必要に応じて指導していくことが望ましく、個人差も大きいので一人ひとりがもつ小さな疑問や関心を取り上げて的確に対応し、数量や図形に対する感覚を、環境を通した保育の中で無理なく培うようにすることが大事である。	【教育内容】 【援助】
文字・標識に対する感覚	・領域「環境」で取り扱う文字や標識とは、子どもが生活環境の中にあふれる文字や標識に触れて、「読んでみたい」「書いてみたい」という意欲と興味や関心をもち、文字などの感覚を豊かにすることである。 ・標識に触れて生活経験を積んだ子どもたちは、やがてクラスの	【教育内容】 【発達や特徴】

	マークを自分たちで考えてつくったり、当番表を工夫してつくったりする。そこには、人に何かを伝えようと考えてマークをつくる子どもの成長した姿が見てとれる。 ・文字や標識を通して人とつながること、新たな世界に触れる喜びを感じながら文字や標識の役割や、言葉の豊かさを子どもに体感させることが大切である。 ・保育者は、文字が様々なことを豊かに表現するためのコミュニケーションの道具であることに子どもが気づくことができるよう、子どもの発達に沿って援助していく必要がある。	【援助】 【援助】

授業テキストの構成では、ポイントの解説、事例、事例を読み解く、まとめという展開で内容を解説している。

	数量や図形　「長い、短い、大きい、小さい、『でかい』」	分類
ポイントの解説	子どもがこのような活動を通して数量や図形を理解するようになるためには、保育者はどのような環境的視点をもって子どもと関わり環境を構成していけばよいのだろうか。事例を通してみていこう。	【導入型】
事例	1 歳児保育室で、コウタロウくんは床に座り、磁石でつながる電車を床に置いて 5 個つなげて一人で遊んでいた。保育者がそばにいくと、つなげた電車に指さしながら「ながーい」と言う。次に、連結した 5 個の電車を磁石のところから 3 個離して 2 個の連結にし、保育者に「みじかーい」と言う。 数量の概念を遊びの中で子どもに体感させて身につけられるようにすることは大切なことです。あなたならどのようなものを用いて、どのように子どもに接しますか？	【事例型】
事例を読み解く	幼い子どもは、具体的な体験や保護者や保育者とのやりとりを通して、長さや大きさを比べるなどしながら、数や量の感覚をもつ。こうした体験を積み重ねていくことによって、数や量などの抽象的な概念に触れ、言葉によって認知しやすくなり、数や量などへの関心を徐々に高めることにつながるのである。	【解説型】
まとめ	数量や図形に関しては、子どもの日常生活の中で必要に応じて指導していくことが望ましく、個人差も大きいので一人ひとりがもつ小さな疑問や関心を取り上げて的確に対応し、数量や図形に対する感覚を、環境を通した保育の中で無理なく培うようにするこ	【解説型】

	とが大事である。	

主な教育内容について、数量・図形では、お芋のチーム分け、針が 6 になったら、お店屋さんチケットへの工夫。文字・標識では、一緒でつながっていく、目で、耳で言葉が広がる園生活、てがみをください、などの内容が掲載されている。

5. 授業テキストの内容分析

どの授業テキストにおいても、理論面の詳細な解説がなされている。理論面を分類したところ、教育内容について説明するもの【教育内容】、子どもの発達や特徴について説明するもの【発達や特徴】、保育者の援助や留意点について説明するもの【援助】、主にこの 3 つに分類されることが分かった。理論面では、それぞれの教育内容の冒頭で、取り上げる教育内容全体の概要を説明するもの、保育現場での事例から、保育者の援助や留意点を解説するもの、事例を紹介した後に、事例の解説として説明を加えるものなどがある。身近な情報や施設に関する内容では、どの授業テキストにおいても理論面に関する内容が中心となっている。

授業テキストの構成では、理論面に関する解説を中心とした構成内容となっているもの、保育現場で行うことのできる実践事例を中心に、体験的に学ぶ内容となっているものもの、保育現場での事例を交えて解説を加えているものなど、様々である。授業テキストの構成内容について分類したところ、教育内容の解説をするもの【解説型】、問いかけをして教育内容に対する興味・関心を引くもの【導入型】、保育現場で行う実践を体験するもの【活動型】、保育現場での事例を紹介するもの【事例型】、事例から考えさせるもの【思考型】、主にこの 5 つに分類されることが分かった。理論面を中心に、教育内容に関する学びを深めていくこと、保育現場での事例を通して、保育者の援助や留意点について話し合うこと、保育現場で使える実践事例を紹介しながら、学生と体験的に活動しながら学びを深めていくことなど、授業者の意図によって、授業テキストの選択は変わってくるといえる。

領域に関する専門的事項で扱う内容としては、それぞれの教育内容の概要について解説をする内容、事例を通した子どもの姿から解説を加える内容、事例に関する説明や解説として学びを深めていく内容、まとめとして、取り上げる内容のポイントについて解説をする内容などが、領域に関する専門的事項で取り上げることが期待できるであろう。保育内容の指導法に関する科目としては、例えば、事例から保育者の援助や留意点を考えていく内容、実践事例を実際に学生と体験する中で、指導上の観点から学生同士意見交流する内容、保育現場での事例から、具体的な保育場面を想定して、指導法の観点から実践力を高めていく内容などが、保育内容の指導法に関する科目で取り上げることが期待できるであろう。保育内容の指導法に関する科目では、領域に関する専門的事項で扱う内容での学びを生かしながら、子どもの発達や特徴を踏まえて、指導をするときのねらいや内容、子どもの具体的な姿や保育者の援助をイメージして、

学習をしていく必要があるだろう。つまり、領域に関する専門的事項の内容と保育内容の指導法に関する科目が連続した学びになるようにしていくことが大切だといえる。

6. おわりに

本研究では、領域「環境」における授業テキスト 5 冊について、主に、数量や図形、標識や文字、身近な情報や施設に関する内容について分析を行った。分析の結果、主に理論面を中心に詳細な解説をするテキスト、保育現場での具体的な事例を豊富に交えながら解説をするテキスト、体験的に活動する内容を中心に実践事例を数多く紹介するテキストなど、様々な授業テキストがあることが分かった。領域に関する専門的事項で扱う内容と保育内容の指導法に関する科目で扱う内容については、それぞれのねらいをしっかりおさえながら、授業テキストの中から取り上げる内容や方法について精選していく必要があるといえる。学びの連続性を踏まえて、授業者の意図やねらい、学生の実態、その他の領域との関連等をふまえ、授業テキストを選択していきたい。

【引用・参考文献】

（1）無藤隆代表保育教諭養成課程研究会編（2017）『幼稚園教諭養成課程をどう構想するか～モデルカリキュラムに基づく提案～』萌文書林

（2）近藤幹生監修、徳安敦・瀧川光治・杉浦広幸編（2016）『生活事例からはじめる－保育内容－環境』青踏社

（3）田宮緑（2018）『体験する　調べる　考える　領域「環境」』萌文書林

（4）無藤隆監修、福元真由美編（2018）『新訂　事例で学ぶ保育内容　〈領域〉環境』萌文書林

（5）岡健編（2019）『演習　保育内容「環境」－基礎的事項の理解と指導法－』KENPAKUSHA

（6）酒井幸子・守巧編（2018）『保育内容環境　あなたならどうしますか？』萌文書林